

## 〈インタビュー〉

構成・文：服部円

取材：飯沢未央、細谷祥央、切江志龍、服部円

宗教認知科学者・藤井修平さんが解説する

## 「宗教」の定義と科学の関係

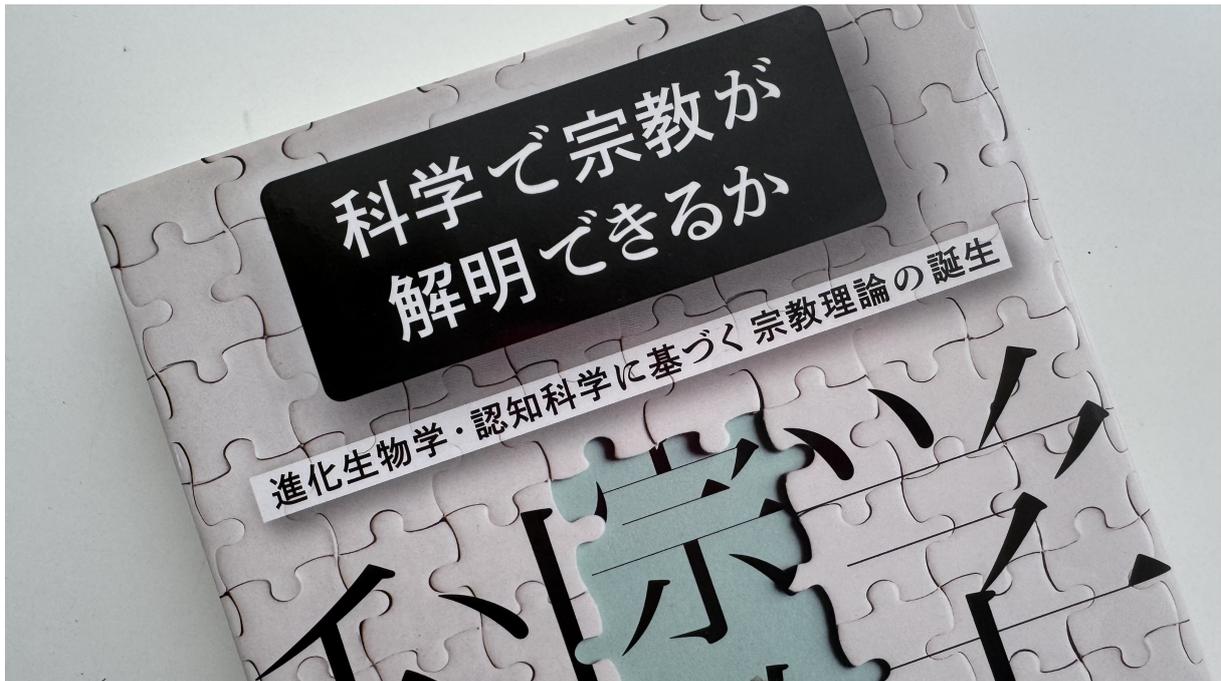


Figure 1. 藤井修平さんの著書『科学で宗教が解明できるか：進化生物学・認知科学に基づく宗教理論の誕生』（勁草書房）の書影。

私たちが生きる社会において「宗教」はどんな役割をもっているのでしょうか。またなぜヒトだけが「宗教」を持つようになったのでしょうか。「宗教」を科学の観点から研究をおこなっている宗教認知科学者の藤井修平さんが、あまり表立って語られにくい「宗教」の成り立ちや定義について解説します。

## 新しい分野の宗教認知科

—現在おこなっている「宗教」の研究について教えてください。

僕の専門は「科学と宗教」です。とりわけ進化生物学、認知科学、心理学などの知見を取り入れた新しい分野・宗教認知科学についての研究をしています。博士論文をもとにした書籍

『科学で宗教が解明できるか：進化生物学・認知科学に基づく宗教理論の誕生』[1]では、宗教認知科学の背景や前提、問題点、社会との関わりについて扱いました。

宗教認知科学の研究は海外ではかなり進んでいるものの、日本の宗教学者にはほとんど知られていない状況です。そこで最先端の研究や理論を紹介し、宗教学に科学の知見を導入できればと考えています。また最近では総合地球環境学

研究所 [2] のプロジェクトとして、人間や文化、自然の共創といったテーマの共同研究に数理生物学や心理学の先生方とともに参加しています。例えば、人と巨樹の関わりを考えた時、自然に対する畏怖つまりタタリのような宗教的な視点が関係しているのではないかと考え研究をおこなっています。

—宗教認知科学という分野があることについて、今回初めて知りました。

日本ではまだ研究者は少ないのですが、関心のある方はいるようで翻訳本はいくつかでています。—昨年、進化心理学者であるロビン・ダンバーの『宗教の起源——私たちにはなぜ〈神〉が必要だったのか』[3] が出版され、解説を進化生物学者の長谷川真理子先生が書かれました。最新の研究の話が書かれているので、「宗教」や進化に興味がある方が読むと面白いと思います。

—藤井さんはなぜ宗教認知科学の研究をすることになったのですか？

もともと文学部出身で美学を専攻していたのですが、「宗教」の中の物語や神話に関心がありました。特に神話はアニメやゲームなどにも大きな影響を与えていて、神話についての理論をしらべていくうちに、認知科学や進化生物学などの観点から「宗教」を解明するという分野があることを知ったんです。また生物学自体にも関心があって、両者が組み合わさった分野が宗教認知科学だったというわけです。

## 「宗教」を定義する

—世界にはさまざまな「宗教」がありますが、なぜ「宗教」は多様な形式をもっているのでしょうか？

これは「宗教」の話をするによく聞かれるのですが、逆になぜひとつにまとまっていないといけないのでしょうか。むしろまとまっているほうがおかしいのではないかと。生物は言うまでもなく多様ですよ。それに比べると生物ほど「宗教」は多様ではありません。

例えば、世界の「宗教」の統計をみると主にキリスト教、イスラム教、無宗教、ヒンドゥー教、仏教となります。少なくとも世の中の4分の3は、4つの宗教にまとまっています。もちろん個々の「宗教」の中でも細かな宗派の違いはありますが、一神教という点でいえば50パーセントにもなります。一神教が哺乳類だとしたら、全生物の50パーセント以上が哺乳類というのはかなり偏りがあると言えるでしょう。

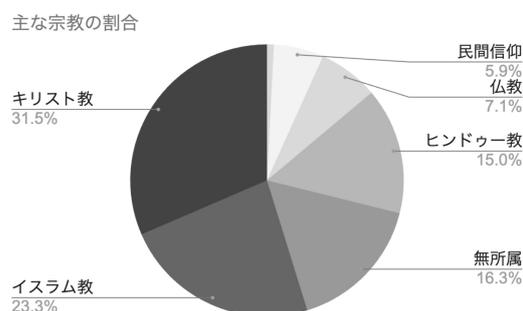


Figure 2. The Global Religious Landscape, 2012 を元に編集部が作成。

—確かに、細分化されているようで実はそこまで多様ではないんですね。生き物の中でなぜヒトだけが「宗教」を生み出したのでしょうか？

その質問に答えるにはまず、「宗教」とは何かを定義しておく必要があります。「宗教」の捉え方はいくつもあり、起源を考える際にどの側面からみるかによって答えは変わります。2021年に刊行された『What Is Religion?: Debating the Academic Study of Religion』[4] という本があるのですが、ここには 19 世紀以降から現在までに「宗教」の定義は少なくとも 33 通りあると書かれています。なので、「宗教」を定義することは簡単ではありません。

とはいえ、色々ありますというのでは話ができないため、今回は生物学の種概念の定義で使われている恒常的性質クラスター説 (homeostatic property cluster view) [5] を使うことにします。種概念も分岐からみるか見方で分類するかといった定義は流動的なようですが、この説では“生物種の特徴である複数の性質 (クラスター) のうち、ある程度の数の性質を持っている個体はその生物種に属している”とみなしています。「宗教」についても同じく複数の性質を挙げて、そのうちある程度の数を持っていたら「宗教」とみなします。こう考えると、「宗教」かどうかは 0 か 1 かではなく、程度の問題というのが理解していただけると思っています。

一なるほど、まず「宗教」を客観的に定義してみると。

そうです。そこで「宗教」を規定する性質を 5 つ (組織、物語、信念、超自然的存在、活動) 挙げていきます。組織は教会や教団、物語は聖書や説法やナラティブのこと。信念は信じ込んでいることで確かな知識とは言えないこと。超

自然的存在とは神や仏など人間を超えた存在のことで、活動は儀礼やお祭りのことです。このように「宗教」は複数の構成要素に分解して考えることができます。

一般的にいわれる「宗教」は、この 5 つの要素を含んでいます。例えばキリスト教であれば、神 (超自然的存在) がいて教え (信念) があり、教会 (組織) や聖書 (物語)、礼拝 (活動) もあります。

一方、お盆にお墓参りに行くことについて、「宗教」に入っているという感覚を持っている人は少ないと思います。行っているのはお墓の掃除をして線香をあげるくらいでしょうか。その行為 (活動) と先祖の霊 (超自然的存在) はありますが、墓参りのマニュアル (物語) や墓参り団体 (組織) はなくあくまで家族や親族と行くだけです。お墓をきれいにするといいことがあるとか粗末にするとバチがあたるということ (信念) を信じている人もいるかもしれませんが、誰もが信じているわけではないでしょう。つまりお墓参りは、「宗教」の構成要素の 5 つ中 2 つしか関わっていないため完全な「宗教」とはいえません。とはいえ、全くの無関係ではないのです。

このように考えると、キリスト教やイスラム教、仏教などは 5 つの要素が必ず入っています。しかし、墓参りや神話、占いといった一部の構成要素しかもたないものは、完全な「宗教」ではないんです。占いも組織的に関わるものではなく、個人がテレビや雑誌などでみるものです。

—お墓参りや占いは宗教的な儀式に近いものの、「宗教」に入っているとはいえないのですね。

宗教の構成要素

組織	物語	信念	超自然的存在	活動
教団	経典	教義	神	儀礼
教会	聖書	信仰	仏	祈り
寺社	新聞	倫理	聖人	教化
教育機関	お経	政治的信念	先祖の霊	冠婚葬祭
研究機関	神話	迷信	妖怪	先祖供養
政治団体	説教	疑似科学	幽霊	病気治し
福祉団体	体験談		天国と地獄	社会福祉
				政治活動

Figure 3. 宗教を構成する5つの要素。

そこで先程の質問に戻りますが、なぜ全ての生物の中でヒトだけが「宗教」を生み出したのかという問いを先ほどの5要素に従って分解すると、なぜヒトだけが超自然的存在を生み出したのか。さまざまな不思議なことを信じて（信念）、物語として語るようになったのか、組織を作って儀礼（活動）をおこなうようになったのか。というふうに考えることができます。

この中で他の動物と比較して答えることができるのは信念についてです。信念とは不思議なことを信じていることで、迷信なども含まれます。アメリカの心理学者であるスキナーがおこなった鳩の実験 [6] で、鳩が迷信行動をおこなうことがわかりました。行動と関係なく餌がでる装置の中に鳩を入れると、何をやっても無駄なのですが、例えば1回転した後にスイッチを押すなど変わった行動をした後で餌がでると、回転をするようになります。これはたまたま起きた偶然を餌を出現させるような原因だと解釈したわけです。迷信もこのような行動だと言われています。因果関係を取り違えているわけですが、それでも同じ条件下ではこうした行動が見られることがわかっています。鳩以外にも多くの動物が持っている能力だと考えられます。

人間の迷信にも同じようなところがあります。因果関係を証明することはとても難しいですよ

ね。多くの場合、人はAの後にBが起きたことで、AはBの原因であると習慣的に考えています。火に手を近づけたら熱くなったり、傷んだものを食べたらお腹が痛くなる。これは問題ありません。ところが、てるてる坊主を吊るしたら次の日晴れたとか、スマホゲームで推しの絵を描いたらガチャが出たというのは、たまたまそうなったわけです。ですので、この考え方は間違いを生むことがあります。

—つまり動物は迷信行動をするので信念があると。では超自然的存在である神についてはどうですか？

どのような能力を持っていれば神を想像できるかを考える必要があります。信念は因果関係の能力があれば可能です。宗教認知科学では、超自然的存在の概念を持ち得る能力を特定しています。超自然的存在の信念の前提として想定されている認知能力は、直観的存在論、行為者検知、擬人観、アミニズム、心の理論などです。これらは認知心理学の分野でよく使われている用語です。

例えば、心の理論を取り上げると、それは他者の心の中のことを考える能力であり、これが人間が神を考える上で必要な能力のひとつです。この能力があると、神にも心があり、人間のように考えると推測できます。お供物をしたら喜んでもらえる。ルールを破ったら咎められるので反省する。これは神の心について考えられるからできることです。実際に他者への心の推論が苦手な自閉スペクトラム症の方に「宗教」のことを聞くと、人間的ではない抽象的な神の概念を持っている傾向が強いことがわかっています。

超自然的存在の認知には、ほかにもさまざまな能力が関わっていますが、大きくは他者と交流する社会的能力が必要です。心の理論は類人猿なども持っているという研究があり、ある程度他者の心の推論ができるので、もしかすると鳩よりも類人猿は超自然的存在を認知している可能性があります。しかしここに言語の壁ができてきます。たとえそのように考えていたとしても、動物は信念を物語として語ることは難しいため、「宗教」の構成要素を満たせないといえます。

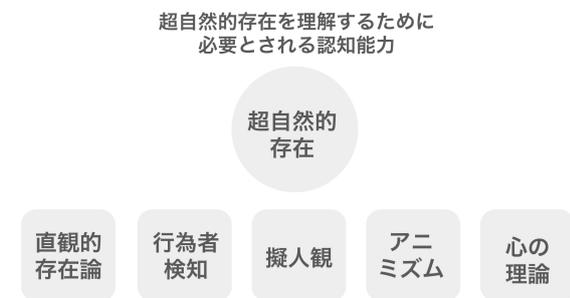


Figure 4. 超自然的存在の信念の前提として想定されている認知能力。

### 「宗教」は副産物なのか

—ではヒトが生み出した「宗教」は、ヒトの進化にどのような影響を与えてきたのでしょうか。

「宗教」をもつことがどの程度ヒトの進化に影響を与えてきたかという、進化的な観点の問いですね。これも宗教認知科学でさまざまな議論がされています。主に適応説と副産物説といわれるものがあります。

副産物説は、「宗教」は生存と再生産に寄与せず、別の目的で進化した能力の副産物であるという説です。副産物説は先程の超自然的存在を認知する能力に関連しています。例えば、心の理論は実際にヒト同士で使われる能力を神に応用したわけですね。また行為者検知は、

例えば自分以外の存在を林の中など周囲に発見する能力のことですが、これも少ない手がかりから捕食者を検知するといった、動物として元来持っている能力です。宗教認知科学では行為者検知が過剰に働くと幽霊の存在を検知するといわれています。暗いところで何かガサガサ音がすると風かもしれないけど、何かがいるように思える。けれど実際にその場所を確認しても何もみえないけれど動くものがいたのではないかと考え、幽霊だとなるわけです。本来は捕食者を検知する能力が幽霊を検知してしまう。これが副産物説です。

一方、適応説とは、「宗教」は確かにヒトの生存と再生産に寄与してきたと考える説です。利益としては個人的なものや集団的のものがああります。宗教が個人的利益を与えるかについては宗教心理学でも扱われており、メンタルヘルスを改善するなどの利益が指摘されています。例えば個人の宗教性、宗教活動、祈りの頻度、教会の支援が高い人は、幸福感や生活満足度、自尊心などが高く、心身の不調や抑うつ傾向、怒りや不安はあまりないという研究結果があります [7]。「宗教」を信じるメリットがあるわけです。

—幸福感が高いから教会へ行ったり、宗教活動がおこなえるという因果関係が逆ということは考えられないのですか？

良い指摘ではあるのですが、その点は宗教心理学の弱点でもあります。この因果関係をしっかりと調べるには、介入実験をしないといけません。しかし神を信じるように仕向けて何が変化するかという実験をおこなうことは現実的にはできません。

—確かに実験で「宗教」を信じさせることは無理な話ですよね。

それでも、「宗教」がどのようにメンタルヘルスを改善するのかのメカニズムが明らかにされれば、ある程度の因果関係は立証されるといえます。また、さまざまな「宗教」を比較することでわかることもあります。例えば、イスラム教の人口は増え続けており、2050年にはキリスト教の人口に追いつき、2100年にはキリスト教を追い抜くと予想されています [8]。一方、無宗教の数は増えません。また個人の宗教性と出生率は正の相関があります [9]。科学が発展すると「宗教」が減るのではないかと考える人も多いと思いますが、確かに減ってはくるのですが、先進国ほど無宗教で出生率が低くなるんです。これにより、「宗教」を信じる人は今後も増加すると予想されています。

—アメリカの Z 世代は無宗教が増えており、教会への出席率が下がっているというニュース [10] もありましたよね。

先進国の中でもアメリカは教会への出席率が下がらないといわれたのですが、ここ最近変化があるようです。とはいえこの話はジェンダー問題にも関連します。女性が家庭にいて子どもを産むことを求められるような、「宗教」による女性の役割の規定が出生率をあげている側面があります。もし出生率がヒトにおいて重要なものであるなら、「宗教」があることがその成功に影響しているわけです。

—「宗教」だけではなく、ものすごく難しい問題ですね。

また集团的利益としては、私が翻訳で関わった書籍『ビッグ・ゴッド:変容する「宗教」と協力・対立の心理学』[11]にも書かれているビッグ・ゴッド理論が明らかにしています。基本的に「宗教」は社会を結束させるといわれます。文化進化論的な視点から見ると、人間集団がある程度大きくなると協力が必要になりますが、大きい集団は匿名性が増すために誰が信頼できる人かを判別できなくなります。そのため警察や司法などがフリーライダーを罰することになります。現代では監視カメラなどがありますが、昔はそういった監視が行き届いていませんでした。

そこで、神が天から人々を監視していて、不道德な人が罰せられるという観念をみんながもっていればコストをかけずに協力的行動が生み出せるわけです。この天上から人々を監視している存在がビッグ・ゴッドです。そのビッグ・ゴッドを信じる人たちの社会が信じない人たちの他集団との競争に勝ち、その結果としてビッグ・ゴッドの信仰が大きくなった。先程の「宗教」の多様性とも関連しますが、キリスト教やイスラム教ではビッグ・ゴッドの存在があり、この2大宗教が広まっているのはこうした競争の結果ではないかといわれています。これが集团的利益といわれてるものです。

このような適応説も副産物説も、どちらも一理あるといえます。最初は副産物として出てきたものの、だんだんと適応的機能を持つようになったとも考えられます。これは生物進化における「外適応」と似た現象と言えるでしょう。

## 道徳と規律のバランス

—生物だと進化にともない形質が変化することがあると思うのですが、「宗教」において発展しやすい特性や変化などがあるのでしょうか？

よく文化進化論でいわれることですが、遺伝子が漸進的に変化するのに対し、文化は跳躍的に進歩します。歴史を連続的にたどってじわじわと変化していくというのは難しいかもしれません。ただ、ビッグ・ゴッド以前の「宗教」は道徳的に寛容だったといわれています。道徳というか、そもそも人間のやることにあまり関心がなかった。例えば、日本の神は、盗みなど悪いことをして怒るというイメージはあまりありません。一方で、入っていけないところに入ったり、木を切ってしまうといった、人間同士の道徳とは関係のないところで怒ることが多い。他方でキリスト教のようなビッグ・ゴッドの宗教では、盗んではならない、殺してはならない、嘘をついてはならないと規定されています。何を禁止するかというのが「宗教」の進化に関連しているといわれています。

—では新興宗教では禁止事項などが多い傾向があるのでしょうか？

現代日本においては、新宗教（新興宗教）は仏教や神道一般に比べてルールが厳しいといえます。ただしそれは決まった方向性ではなく、反対に仏教や神道は大衆化するにつれて、徐々にルールが少なくなっていく傾向があります。仏教の中でもスリランカの上座部仏教の僧侶は、飲酒や結婚が禁止されたり厳しい戒律を守って

いますが、日本の仏教はそうした戒律は徐々になくなっていった歴史があります。

## 科学と「宗教」は対立するのか

—欧米の科学者にはキリスト教徒も多いと思いますが、どのように「宗教」と科学の折り合いをつけているのでしょうか？

このテーマも「科学と宗教」という分野で研究されていますが、一番揉めるのが進化論ですよ。誰もが知る進化生物学者のリチャード・ドーキンスもいくつか「宗教」を否定する本を書いています。ただ、彼はかなり偏った見方をしているといわれます。一般に科学と「宗教」は対立している、あるいは正反対のものであると捉えられがちです。ドーキンスはいわゆる新無神論者で「対立モデル」の提唱者です。「対立モデル」とは、科学と「宗教」は敵同士であり、これまでも対立を繰り返してきた、一方が発展するともう一方は衰退するという考えです。彼の著書『神は妄想である—宗教との決別』[12]の中でも、神による生命の創造論は進化論により否定されているということや、宗教は人間の心が作り出したものである、「宗教」は科学を否定するので有害であるといったさまざまな理由で「宗教」を否定しています。実際にアメリカのキリスト教徒は進化論を否定している人が多い。

一方、生物学者かつ哲学者のフランシスコ・J・アヤラは『キリスト教は進化論と共存できるか？ ダーウィンと知的設計』[13]という著書の中で、自身がキリスト教徒であり生物学者であることに矛盾がないと述べています。それは科学と「宗教」が世の中の別々の問題を扱っている

からということです。これは「独立モデル」と呼ばれています。科学は自然界や物理法則がどのようになっているかという事実の問題を扱っていますが、人はどう生きるべきかという価値の問題は扱えないと。一方で「宗教」はどう生きるべきかといった人生の意味や価値について扱うことができ、事実については扱っていない。こう考えると矛盾していなくて両者を独立に考えることができる。「宗教」が〇〇しなさいというのは個人の人生の意味の話であって、宇宙がどのように成り立っているかはキリスト教から学んでいないと述べられています。

—進化論についてもキリスト教では議論がありますよね？

そもそもダーウィンの進化論とキリスト教の対立は、20世紀に入ってからアメリカで強くなりました。ファンダメンタリズム（原理主義）の名の下に、進化論に対する否定的な運動が広まり「創造科学」という主張が生まれます。これは聖書に沿って、地球は数千年前に6日間で創造され、地層の中の化石はノアの大洪水の際に形成されたという独自の知識体系を形成しました。創造論者は実際にケンタッキー州に創造博物館を設立しており、そこには人間と恐竜が同時に暮らしていたという模型が展示されています。こうした見方は現代科学の多くと矛盾するとはいえ、アメリカの成人の40%の人が神が人間を現在の形に創造したと信じています。さらに33%の人が人類は他の動物から進化したが、神が進化を導いたと考えています [14]。この考えでいえばキリスト教と進化論が矛盾しないのです。カトリックでは1996年にヨハネ・パウロ2世が進化論

は単なる仮説以上のものとして受け入れられるとしています [13]。現在、進化論を完全に否定しているのは、保守的な福音派プロテスタントと一部のイスラム教徒のみといわれています。

—なんとか矛盾しない落とし所をみつけた感じでしょうか。

近年では、より共存しているケースもみられます。医師であるアンドリュー・ニューバーグの著書『神経神学：科学は霊性にいかにか光を当てるか』 [15] では、神経科学や脳科学と神学がわさった学問を提唱しています。ニューバーグは瞑想をしている際の脳の状態を測定する専門家です。瞑想時の脳状態を測定すれば、科学的にも新しい知見が得られるし、宗教的にも瞑想に物理的な効果があることがわかる。2つの分野がコラボレーションすれば、それぞれ発展できるのではないかという話です。さらに新しい瞑想方法が開発できる可能性もあります。近年流行っている集中力を高めるなどといわれるマインドフルネスは、ここで研究されている上座部仏教や禅が組み合わさったものです。マインドフルネスにはエビデンスがあるということで広まっています。「宗教」と科学はお互いが協力しあうこともできるという考え方です。このように科学者の中でも「宗教」を否定する人と科学とは矛盾しないという人にわかれているんです。

—脳科学者の池谷裕二さんが“ヨガやスポーツなど特殊な訓練を積むと念じて自分の心拍数を下げられるようになるメカニズムを解明した”という論文 [16] をサイエンス誌に発表していましたよね。

これはバイオフィードバックの研究ですね。バイオフィードバックとは、自身の心拍や脳波を見ながらそれらの調整を試みることで、普通は自分で制御できない不随意性の生理活動を制御できるようになるという技術です。この論文では、ヨガなどの瞑想技法もバイオフィードバックを行っているともみせるといっていますが、このような点に着目した研究は以前から存在していました。坐禅は「調身・調息・調心」の技法であるとして、脳波を測定したり、バイオフィードバックの訓練をしたりする研究が 50 年以上前から日本で行われています [17]。当時の成果は今ではほとんど参照されていないですが、現在同じような視点からの研究が進められているのは喜ばしいことです。

### これからの「宗教」

—「宗教」は今後どうなっていくのでしょうか？

宗教の未来についてはさまざまな学者が議論していますが、よくいわれているのは世俗化理論です。近代化が進むにつれて「宗教」はより個人化していき、組織や政治とは関わらないものになり、結果的には衰退する。これはドーキンスの考えと一致しています。科学が発展すると「宗教」の出番がなくなってくるわけです。この理論についての批判はありますが、西洋社会では概ね予測通りに進んでいると考えられています。ヨーロッパではむしろ日本よりも「宗教」は形骸化しています。アメリカはその例外といわれていましたが、先程の Z 世代の話のように急速に教会に行かなくなっています。

ただ、これによって「宗教」が完全になくなっ

ていくわけではないんです。逆に増えているのはスピリチュアルな活動です。欧米ではスピリチュアル・バット・ノット・レリジヤス (Spiritual But Not Religious / 無宗教型スピリチュアル現象) と呼ばれる人たちが増えています。それは「宗教」の 5 つの構成要素から組織を抜いたものともみせませす。つまり教団など団体に入らずにおこなう行為です。占いやニューエイジ的なヨガ、オーガニック信仰などもここに含まれます。

また宗教認知科学では、心の理論が神を生み出したといいましたが、宗教を生みだしやすい心をヒトはデフォルトで持っているという考えがあります。そのため、ヒトが生物学的に変化しない以上は自然と宗教的な信念を維持するだろうと考えられています。つまりより文化的な部分は社会の変化にあわせて変わっていくかもしれませんが、超自然的存在や迷信などは今後も存続すると予測できます。

—AI (人工知能) と「宗教」についても議論がされているのですか？

学会でもかなり話題になりますし、アンドロイド観音なども登場していますよね。また ChatGPT を搭載したブッダボットプラスという仏教対話の AI なども開発されています [18]。そもそも ChatGPT にブッダの経典を学ばせれば、ブッダの考えをもった AI がつくれるだろうというのは想像できると思います。ただ、そのような AI が果たして「宗教」としてどの程度広まりうるのか、AI をどの程度人格的なものと感じるのかはわかりません。

—SF 的な発想ですが、AI が意思を持ってい

そうと感じるのは AI に超自然的存在を感じているのではないのでしょうか。

ある研究者がいていましたが、AI は個性をもたないという特徴があります。もちろん細かく設定をしていけば答えは変わりますが、あくまで集合的な存在であり、集合的な存在をヒトはあがめないのではないかと思います。むしろ AI よりもアイドルの推し文化や VTuber のような対象のほうが「宗教」の代替物になっていく可能性はあると思います。神絵師なんて言葉がありますが、普通の人間を超越しているので超自然的存在に近いともいえますね。

—「宗教」の変化が文化に影響はすることはありますか？

神話などは文化にも影響を与えていますし、旅行でパワースポットに行くというのはスピリチュアルツーリズムといわれます。また最近オカルトも復活していると思います。最近の例では、「地球の歩き方」がオカルト雑誌『ムー』とコラボして、日本や世界のオカルトスポットを紹介しています [19]。これはある意味パワースポット巡りと同じです。またアニメやドラマでロケ地をめぐることも聖地巡礼といわれますよね。『パラノマサイト』[20] というゲームでは、東京都墨田区に伝わる怪談をもとにしたストーリーが展開されていますが、ゲームに登場した場所をめぐるための地図も制作されています。これは聖地巡礼の一種であり、オカルト要素も混ざっています。明確に「宗教」とはいえないけれど、超自然的存在を感じさせるようなエンターテインメントが増えているように思えます。

—最後に、「宗教」とシャコとの共通点やイメージはありますか？

あくまで連想の範疇ですが、シャコをはじめとする甲殻類はユダヤ教においては食べてはいけないことになっています。ユダヤ教には食物規定（カシュルット）があり、蹄が分かれていないもの、反芻しないもの、ほとんどの昆虫、猛禽類など一部の鳥などを食べることが禁止されています。その中でヒレとうろこのない水中のもの、つまり甲殻類やタコなども禁止されています。

なぜこのような規定があるかという、どうやら生き物を正常な生物と異常な生物にわけているらしいんですね。水中の生物はヒレとうろこがあるのが正常で、シャコやタコは異常があるので食べてはいけない。これはフォーク・タクソミー（folk taxonomy）と呼ばれる、生物学とは全く別の民俗由来の分類方法です。文化や「宗教」によりさまざまな生物の分類方法があるんです。

藤井修平（ふじい・しゅうへい）

宗教学者。國學院大学研究開発推進機構助教。2021年東京大学博士後期課程修了。文学博士。専門は宗教学理論研究で、欧米で盛んな宗教心理学や宗教認知科学といったアプローチを取り入れている日本では数少ない研究者。他に、心理学分野で注目されるマインドフルネスを宗教学の視点から論じるなど、「宗教と科学の関係」に着目した研究活動を展開している。著書に『科学で宗教が解明できるか：進化生物学・認知科学に基づく宗教理論の誕生』（勁草書房）など。

## 注釈

※以下に掲載されている URL は 2025 年 9 月 25 日現在の内容とする。

1. 『科学で宗教が解明できるか：進化生物学・認知科学に基づく宗教理論の誕生』藤井修平（勁草書房）  
<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b618805.html>
2. 総合地球環境学研究所 <https://www.chikyu.ac.jp/>
3. 『宗教の起源——私たちにはなぜ〈神〉が必要だったのか』ロビン・ダンバー（白揚社）  
[https://www.hakuyo-sha.co.jp/science/shukyo\\_no\\_kigen/](https://www.hakuyo-sha.co.jp/science/shukyo_no_kigen/)
4. Aaron W. Hughes & Russell T. McCutcheon (Ed.). What Is Religion?: Debating the Academic Study of Religion. Oxford University Press, 2021. <https://www.amazon.co.jp/dp/0190064978>
5. 恒常的性質クラスター説 (homeostatic property cluster view) : Richard Boyd. "Homeostasis, species, and higher taxa." (1999)
6. Burrhus Frederic Skinner. The behavior of organisms: An experimental analysis. BF Skinner Foundation, 2019.
7. Harold G. Koenig, Religion, Spirituality, and Health: The Research and Clinical Implications, ISRN Psychiatry, 1-33(2012).
8. The world' s fastest-growing religion is ...  
<https://edition.cnn.com/2015/04/02/living/pew-study-religion/index.html>
9. Sarah R. Hayford, S. Philip Morgan, Religiosity and Fertility in the United States: The Role of Fertility Intentions, Social Forces, 86(3), 1163–1188(2008).
10. アメリカの若者が宗教に関心が薄いのはなぜ？「宗教離れの要因」をニューヨーク Z 世代とともに考える <https://news.audee.jp/news/y11o8DQ4OB.html?showContents=detail>
11. 『ビッグ・ゴッド：変容する「宗教」と協力・対立の心理学』アラ・ノレンザヤン（誠信書房）  
<https://www.seishinshobo.co.jp/book/b602115.html>
12. 『神は妄想である—宗教との決別』リチャード・ドーキンス（早川書房）  
<https://www.hayakawa-online.co.jp/shop/g/g0000112163/>
13. 『キリスト教は進化論と共存できるか？ダーウィンと知的設計』フランシスコ・J・アヤラ（教文館）  
<https://shop-kyobunkwan.com/4764260255.html>
14. 40% of Americans Believe in Creationism  
<https://news.gallup.com/poll/261680/american-believe-creationism.aspx>
15. 『神経神学：科学は靈性にいかに光を当てるか』アンドリュー・ニューバーク（北大路書房）  
<https://www.kitaohji.com/book/b624045.html>
16. Airi Yoshimoto et al., Top-down brain circuits for operant bradycardia. Science, 384,1361-1368 (2024). <https://www.science.org/doi/10.1126/science.adl3353>
17. 藤井修平「瞑想の科学の過去と現在—1960年代の禅心理学の現代への意義—」『中央学術研究所

紀要』49、2020年、147-170頁。[https://rirc.or.jp/media/pdfs/Fujii\\_202011.pdf](https://rirc.or.jp/media/pdfs/Fujii_202011.pdf)

19. 仏教対話 AI の進化：「ブッダロボットプラス」の開発— ChatGPT4 搭載でより詳しい回答が可能に—

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-07-19-0>

20. 『地球の歩き方 ムー 異世界（パラレルワールド）の歩き方—超古代文明 オーパーツ 聖地 UF

O UMA』地球の歩き方編集室（学研プラス）<https://hon.gakken.jp/book/2080171600>

21. 「パラノマサイト FILE23 本所七不思議」スクウェア・エニックス

<https://www.jp.square-enix.com/paranormasight/>